



セルビアから来たミリツァ・ニコリッチは、若干26歳である。今回、12点のストレート・フォトを展示した。写し出されている世界は、平凡な風景に見える。

しかし驚くべきは、先ずその色彩である。ミ



リツァはデジタルによる加工をせずにストレートに焼いたという証言を、ステップギャラリーに残す。



それはセピアであったり、まるで何かのフィルターを通していたり、現実の風景ではなかったりするような感触

を見る者に与える。すると本来の「色」とは何かを考えさせられる。カラー写真における色彩とは、エフェクトとした技術よりも正確さを求められる場合が多々あるのであろう。ミリツァにとって正確な色彩であるとすれば、それは見る者の問題となっていくであろう。

不可思議なのは色彩だけではなく、写された対象の透明さ/不透明さにも表れる。水面と水面に映る柵、それを支える空の作品は、鏡像の作用よりも水面の透明さまでが実体として立ち現れる。対象がその形を留めるまでに写されているのかと思うと、限りないまでに透明で、まるで皮膚の底に存在する血流や神経にまで目が行き届いているかのように錯覚してしまう。文字通り目の行き場がないのだ。

色彩/透明感を支えているのは、やはりミリツァは写真が持つ本来の力、光を捕えていることに正確に答えている姿に由縁するのではないだろうか。樹木から射す日光、ブランコを捕えるライトは勿論、澄み切った空気の中に浮かび上がる湖沼、降り頻る雪の中で埋もれる街の風景の中にも、微細ながらも確実な光が瞬いているのだ。

その瞬間を逃さず捕えるのではなく、緩やかな光をなだらかなままに包み込むことを前提としているのではないだろうか。写真が持つシャッタースピード、被写体との距離、撮影者自らが持つフッサールの言う内的時間という「速度」を破棄し、美術的ではなく写真でしか出来ない方法論を表している。ミリツァには、自らが自らのまま撮影する方法論を、これからも追求して欲しいと強く願う。

